# 大学の国際化をめざす新しい教育プログラム

## ―大阪大学短期留学特別プログラムOUSSEPの1年―

海外交流

北　浜　榮　子*

# The First Year of the Osaka University Short-term Student Exchange Program (OUSSEP)

***Key Words*** : Osaka University Short-term Student Exchange Program (OUSSEP), Technical Japanese, Field Trip, International Exchange Subject

## 1．はじめに

昨年10月，OUSSEP(オウセップ)(大阪大学短期留学特別プログラム)と呼ばれる画期的な国際教育プログラムが大阪大学に創設された．筆者は，昨年9月から本学留学生センターの教官として留学生教育に携わることになり，以前，本誌[1]で執筆された中村収三教授とともにこのプログラムのコーディネーターを務めている．

本プログラムでは，大阪大学と学術交流協定を締結している世界各国の大学(現在，協定に単位互換と授業料相互不徴収条項を含む大学は部局間協定も入れて36大学ある)の学生を，1年間，母国の大学に在籍したまま受け入れ，特別教育カリキュラムの英語による授業を行う．同様の交換留学プログラムは，一昨年から東京大，筑波大，九州大，昨年から東北大，千葉大，名古屋大，広島大でも実施され，今年はさらに国立3大学での増設が予定されている．このようなプログラムが国立大学で続々と開設されるに至ったのは以下のような事情を反映している．

一つには，現在までの外国人留学生の総数は約5万人余であり，2000年を目標とした「留学生受け入れ10万人政策」実現のために日本はさらに受け入れ数を増やす努力をしなければならないということである．二つ目には，この種の短期留学生交流が，最近，諸外国において盛んになっており，日本もこの留学生交流の新しいニーズへの対応が必要になったということである．

日本への留学生の受け入れ数は，欧米諸国と比べると格段に少ない．留学を志す外国の若者に日本留学を決意させるには，「魅力ある教育環境」を作ることが日本の大学にとって最大の課題となるであろう．さもなければ，欧米の学生は日本に来ることを躊躇し，アジアの学生は日本を“素通り”して欧米に行ってしまうかもしれない．

本稿では，OUSSEPの魅力に発展させたいと考えている独自の取り組みを紹介する．最初に異文化理解に役立った「OUSSEPアセンブリー」，次にOUSSEPの特徴的な授業形態について，最後に大阪大学の国際化をめざす「国際交流科目」について述べることにする．

## 2．異文化理解へ

昨年10月9日，コンベンションホールで，

* Hideko KITAHAMA
1944年8月13日生
1972年大阪大学大学院理学研究科博士課程修了
現在，大阪大学，留学生センター，大学院工学研究科(兼)，助教授，理学博士，高分子固体構造論，科学教育，科学技術日本語
TEL 06―879―7128
FAX 06―879―7119
E-Mail hkitahama@user.center.osaka-u.ac.jp

5カ国(カメリカ，カナダ，韓国，オーストラリア，タイ)の6大学(ワシントン大学，マギル大学，釜山大学，オーストラリア国立大学，嶺南大学，チュラロンコン大学)から22人の留学生を迎えて第1期OUSSEPの開講式が開かれた．式の最中，一人の女子学生が突然全員のサイン入りのリボンで飾ったチヨコレートを金森順次郎総長に手渡した．日本流の式典の中では起こりようもない突然の出来事に，新しいスタイルの国際交流の象徴的な幕開けと実感した列席者も多かったのではないかと思う．

短期留学コーディネーターは，本プログラムの進行と調整，授業担当をするほかに，本プログラムの留学生のクラス担任の役割を果たす．言い換えれば，筆者はクラスのホームルームの先生といえるかもしれない．学生たちはそれぞれに異なった文化，習慣と，外国留学，移民などの個人的ヒストリーをもっており，その上，概して日本人学生や他の一般留学生より自己主張が強い．この学生たちを日本社会にどのように受け入れたらよいのか，これが最初に直面した大きな問題であった．

授業はすべて選択科目で，留学生は自分独自の時間割で授業を受け，全員が一緒に集まることはない．これでは互いに仲間としての意識を作り上げていくどころか互いの存在すら知らないということにもなりかねない．そこで対策として考えついたのが，毎週一回昼休みに留学生センターの空き教室で，弁当持参のホームルームを開くことであった．この「OUSSEPアセンブリー」と名づけられた30分間に，説諭，議論，連絡などを集中して徹底的に行った．日本の大学寮の現状を説明して不満を諌めたり，英語圏の学生に非英語圏の学生にも理解しやすいようなTOEFL 550点程度の英語を使うことを求めたり，また，時間の約束のルーズさを戒めたりしたのもこの時間である．

それぞれの学生は，自文化と他の学生や日本の文化との違いを客観的に認識することによって相手の文化を理解し，さらに互いの文化を尊重するという過程を経て文化の違いを超越しコミュニケーションができるようになる．この一連の異文化理解のプロセスを実践する場として，OUSSEPアセンブリーは適当な場であったと考えられる．この中でお互いの文化を尊重し，適度の間隔を保ち干渉しあわないという「OUSSEP環境」が育ち，それに基づく学生間，学生と教官の間の信頼関係ができあがったのである．

## 3．特色ある授業の試み

短期留学プログラムを開設している大学にとっては，授業をいかに魅力的なものに作り上げるかが最大の課題である．しかし現実には，授業を英語で行うことと，これに付随する授業内容の問題，授業を担当する教官に過分な負担がかかるという問題がいずれの大学にもある．そこで全国各大学が持っている優れた授業を大学間で共有することができればこの問題の一つの解消策になると同時に，日本における短期留学プログラムの魅力になるかもしれないと考えられる．このような「共有授業」のモデルとして推薦したい例を秋学期のOUSSEPの科目の中からあげると，「ミクロの世界からの交信(理学部担当)」が有力候補であろう．これは，わかりやすい科学の演示実験を多く取り入れており，理科系，文科系，双方の学生に評判が高かったものである．共有するための一つの方法として，大阪大学は「スペース・コラボレーション・システム」(SCS)と呼ばれる衛星通信を使った大学間ネットワークを利用して，双方向性のいわゆる“テレビ講義”を関係大学間で提供しあうことを提案している．

また，今年のOUSSEPでは，表1および表2に示すように「フィールド・トリップ」と名づけた学外見学が数多く実施された．日本社会への理解を深めるためには教室での講義から学ぶだけではなく現場での体験や交流が必要不可欠であるという観点から，複数の授業のカリキュラムにフィールド・トリップが組み込まれている．これを定着したものに仕上げていくことも，OUSSEPに学生を引き寄せることのできる特色の一つになるかもしれない．

このうちの6回は，筆者が担当する「科学技術日本語」の授業[2]の中で実施したもので，テーマは，日本のエネルギー(秋学期)と環境問題

表1　秋学期のフィールド・トリップ

| | 訪　問　先 | 授業科目 | 実施日 |
|---|---|---|---|
| 1 | 関西電力(株)南港火力発電所 | 科学技術日本語 | 11月27日 |
| 2 | 関西電力(株)大飯原子力発電所 | 科学技術日本語 | 12月18日 |
| 3 | 関西電力(株)六甲新エネルギー実験センター | 科学技術日本語 | 1月22日 |
| 4 | 大阪市議会 | 世界の中の日本政治 | 1月29日 |
| 5 | 川崎製鉄(株)水島製鉄所 | 日本の産業組織 | 2月12日 |

表2　学期のフィールド・トリップ

| | 訪　問　先 | 授業科目 | 実施日 |
|---|---|---|---|
| 1 | ごみ発電システム(大阪市環境事業局)<br>大温泉「咲くやこの花館」(大阪市建設局) | 科学技術日本語 | 5月14日 |
| 2 | 白鶴酒造(株)西宮工場 | バイオテクノロジー | 5月21日 |
| 3 | 三菱電機(株)技術研修所(三田市) | 日本の産業組織 | 5月28日 |
| 4 | 大阪地方裁判所 | 現代日本社会と法 | 6月10日 |
| 5 | (財)地球環境産業技術研究機構RITE<br>新世代通信網実験協議会BBCC(関西学研都市) | 科学技術日本語 | 6月11日 |
| 6 | 日本触媒(株)姫路工場 | 日本の産業組織 | 6月18日 |
| 7 | 滋賀県立琵琶湖博物館(草津市) | 科学技術日本語 | 7月2日 |

(春学期)である．筆者は過去5年にわたって大阪外国語大学で学部留学生の化学の教育[3),4)]に従事したが，毎年2-3回，留学生とともに大学や民間の研究所を訪問する「フィールド・トリップ教育」を繰り返し試行した．これらをさらに発展させたものが表に示したものである．

このような見学を実施するためには企業や研究所等の受け入れ機関の協力と，旅費等の資金が必要である．今年度の「科学技術日本語」では，『フォーラム・エネルギーを考える』に財政，実施の両面にわたってご協力をいただいて行うことができた．

留学生が提出するレポートを見ると，自国では知ることのできない情報を得た驚き，見学を通じて知った日本と自国との比較，通常で得られない機会を与えてくれたことに対する感謝など多くのことが綴られている．これらの留学生の多くは帰国後オピニオンリーダーとして国際問題に影響を与える機会が多いと考えられるため，フィールド・トリップの果たす役割はきわめて重要であると思われる．この趣意を理解していただき，諸企業，諸団体に協力と援助をお願いしたい．また，政府にはこの目的のための予算配分を要求していきたい．

## 4．日本人学生の国際性を育てる

現在，OUSSEPで行われている授業科目は「国際交流科目」として大阪大学の学生にも公開されている．留学生とともに英語で受講できるOUSSEPの授業に魅力を感じる日本人学生は少なくないと思うのだが，PR不足か，参加した学生は数名に満たなかった．筆者の授業に出席した日本人学生のU君が記したOUSSEP参加の感想を次に紹介する．

(前略) ①留学前の英語学習の一環としてこの授業を受講したわけであるが，当初考えていたよりも非常に授業内容が興味を持てるものであり，毎回授業に参加するのが楽しみであった．日本人で受講していた学生が私だけであったせいか自分が日本の学生の代表のような気分で積極的に自分の意見が述べられた気がする．こんな気持ちで授業にでられたのは大学時代を通じて初めてであった．これが本来の授業というもののような気がし，何かこれまで受けていた授

業が教授の一方通行の講義でしかなく周りの学生とも意見を交えない乾燥しきったものに見えた．②なぜこのような講義が大学内で少ないのだろうか．（中略）非常に私は③留学生から大きな影響を受け自分の考え方を変えるチャンスを得た気がする．（後略）

このレポートから，本プログラムが日本人学生に公開されることによって生じる，大阪大学の国際化に関する次の三つの示唆が読み取れる．

①受け入れの次のステップとして，大阪大学から外国の大学へ学生の「送り出し」を考えねばならないが，OUSSEPの中でその予備軍が育つ可能性が高い．

②外国の大学の学生の教育を行う過程で提起される問題から，国際的見地に立って大阪大学の教育のあり方を見直すきっかけとなる．

③日本人学生が留学生から影響を受け，国際的な視野を持つようになる．

このような観点から，次年度には日本人学生と留学生，同数程度の参加が達成されることを期待する．これが実行されれば，現在のままでは一般学生と隔離された感じがする留学生の教育環境の改善にもなるし，大阪大学の中に行われている教育の国際化の推進にもつながるだろう．さらに本プログラムで受講した学生がどんどん海外に留学するようになればよいと念願する．

## 5．おわりに

OUSSEPが開設されてまもなく1年を迎える．OUSSEPは企画，運営にわたって全学的協力のもとに実施されており，各学部の先生が授業担当となっている．1年を終えてプログラムの成果を振り返ったとき種々の観点から反省や課題がでてくるであろう．ここではOUSSEP黎明期に関わった多くの方々のご協力を感謝して，ともども改善に力をつくしていきたいと思っている．

―1997年7月に記す―

## 参考文献

1）中村収三，生産と技術，49(2)，75-77(1997)．
2）北浜榮子，第10回大阪大学留学生教育・支援協議会予稿集(1997年3月)．
3）北浜榮子，化学と教育，43(2)，117-121(1995)．
4）北浜榮子，化学と教育，44(6)，387-390(1996)．